＜巻 頭 言＞

次世代のこと

青　山　俊　樹*

今，中部が元気である。２月に開港した中部国際空港は旅客，貨物ともに好調であり，「愛・地球博」も目標入場者の1,500万人を突破し，2,000万人を超える勢いである。

中部地方（静岡，愛知，岐阜，三重）のGDPは約63兆円であり，これは諸外国のGDPランキング第11位に相当するだけの大きさである。

この経済力をもたらした要因は，いくつか挙げられるが，道路，ダム，上・下水道，鉄道等の社会資本を先人達の努力により営々と蓄積してきたことが大きい。

その象徴的なものの一つとして，名古屋市の3,450haにも及ぶ区画整理事業がある。敗戦後の焼け野原となったまちを大規模に区画整理し，市内各所に散在していた18万基の墓地をも平和公園に集め，100ｍ道路２本，50ｍ道路９本をはじめとする広い街路網を整備した。今の自動車文明を悠々と受け入れるだけの街路網の整備を，人口約100万人の昭和20年代に計画した先見性には頭が下がる思いである。

水に関しても名古屋市は先見性を発揮してきた。明治の末に当時人口30万人だった名古屋市の水源をどこに求めるかで大きな議論があった。明治27年に内務省衛生局顧問W.K. Burton氏から出された意見書では，水源を入鹿池という現在の犬山市にある池に求めようとするものであったが，当時の責任者は愛知県技師上田敏郎氏の案を採り，遠くても豊かな水量のある木曽川から取水することとした。その計画は給水人口を46万人とし，隧道，暗渠，開渠は100万人分

* 独立行政法人 水資源機構 理事長

とするものであった。また，その費用は，市の予算の５年分に相当する莫大なものであり，80万ポンドの英貨公債を発行する等の手当を行ったが，その結果，現在の220万人都市と中京工業地帯として発展する礎が築かれた。

愛知県には，知多半島と渥美半島がある。いずれも水不足に悩まされてきた地域であるが，木曽川を水源とする愛知用水と豊川を水源とする豊川用水により，今では全国有数の豊かな地域となっている。平成６年の渇水時，新聞に「愛知用水ができるまでは，知多半島の農家の嫁にとっては，水汲みは実につらい仕事であった。愛知用水ができて，蛇口から水が出るようになり，風呂の水，炊事の水，洗濯の水を井戸から汲み運ぶつらさから解放されたが，この渇水で井戸から水を運ぶ生活に戻り，往事を思い出している。」という主旨の投書が載ったが，世銀から借金してまでこの事業を完成させたことも，この地域の先見性の現れであろう。

愛知用水は，世銀からの借り入れによって建設され，今の時代に大きな貢献をしているが，国の経済力のついた現在では，建設国債で公共事業を行うのが一般的である。

この建設国債の発行額は，バブル以前の昭和60年度が6.3兆円，バブルの頃すなわち平成１～２年度で約6.3～6.4兆円，バブル崩壊の後の平成10年度がピークで約17兆円，そして平成17年度は6.2兆円である。一方，社会福祉関係や国債の利払いのため発行される特例国債の発行額は，昭和60年度が６兆円，平成１～２年度はほぼゼロ，平成10年度は17兆円，そして平成17年度は28兆円である。

次の世代にも有効な社会資本を整備するための建設国債がバブル期以前の水準になっているにも拘わらず，今の世代だけが自分達の暮らしを享受するための費用がどんどん膨らんでいく。これは「モラルハザードを起こした」と次世代から批判されても甘んじて受けなければならない異常事態である。

筆舌につくしがたい困難の中で，社会資本整備を営々と進捗していただいた先達のことに思いめぐらすとき，自分たち今の世代も次世代のためにもっともっと努力すべきと自らを叱咤している今日この頃である。